
インフィニットストラトス ~ Brave ~

ジーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス 〈Brave〉

【Nコード】

N5373BA

【作者名】

ジーク

【あらすじ】

ISそれは女性にしか仕えない世界最強の兵器である
しかしISを動かした二人の男がいた
一人は織斑一夏。そしてもう一人は一夏の幼馴染である龍宮翼である
これは彼と仲間達の友情と絆の物語

第1話 始まり（前書き）

初めての小説です。どうぞご覧ください

第1話 始まり

“IS”

それは女性にしか仕えない世界最強の兵器である

しかしISを動かした二人の男がいた

一人は織斑一夏。ブリュンヒルデの称号をもつ姉、織斑千冬の弟である

そしてもう一人・・・

IS学園

IS操縦者育成用の特殊国立高等学校である。操縦者、メカニックなどISに関わる人材はこの学園にいる。生徒、職員全人が女性と言う学園に一台の赤いバイクが向かっていた

バイクには一人の青年が乗っていた

学園のゲート前でバイクが止まり乗っていた青年がヘルメットをはずした

赤い髪と緑色の目が特徴的な青年で首には六角形の赤い宝石のペンダントをしていた

「ふう〜やつと着いた」

そこに黒いスーツを着た女性が着た

「やつと来たか龍宮」

「お久しぶりです千冬さん」

そうこの人が世界最強のIS操縦者、織斑千冬である

「随分遅かったな」

「すみません姉貴がこれの仕上げに時間がかかって」

龍宮と呼ばれた青年は首のペンダントを指した

「そうか、静香は元気か？」

「相変わらずですよ。IS操縦者引退してからIS研究に励んでますし」

「ふっそうかまあいい時間だついて来い」

「はい」

そう言われて青年は千冬に着いて行った

そう彼がもう一人のISを動かせる男

彼の名は龍宮翼。一夏や箒の幼馴染でヴァルキリーの称号を持つ姉、龍宮静香の弟である。

そして彼の首にかけてあるペンダント、それこそ彼の姉が作った彼の専用機、スピリットキングダム社が誇る最強のIS、そして彼の最高の相棒、IS「ジーク」である

彼の物語が今始まる

第1話 始まり（後書き）

感想待ってます

キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です

キャラ紹介

龍宮 翼

年齢：15

毛色：赤

髪型：短髪のクセ毛のはねているかんじ

瞳の色：緑

趣味：小説、花の手入れ

専用機：ジーク

一夏や筈の幼馴染である。小学6年生の時に引越してしまいその後連絡を取ってなかった
親が事故で亡くなり今は姉と二人暮らしである。料理、家事全般など全てこなす

剣術、体術をまなんでいる。そのため筈より剣道が強い
特撮、アニメなどが好きで部屋にはDVDが沢山ある
姉の使いでよくコミケに行っている

非公式であるが彼が世界で始めてISを起動させた男である

龍宮 静香

年齢：千冬と同一年

毛色：栗色

髪型：サイドテイル

瞳の色：青に近い空色

趣味：研究、同人誌

翼の姉で千冬の幼馴染でありヴァルキリーの称号を持っている。スプリットキングダム社の社長を

勤めている

もともとIS操縦者で「フリーユージェル」と言うISを持っていたがある事件のせいで大怪我をし

操縦者を引退し今でわSK社の研究員として開発者としてISを開発している

翼と同じく家事全般ができる

研究に忙しくてコミケに行けず弟の翼に使いにいってもらっているある組織について翼と一緒に調べている

キャラ紹介（後書き）

感想待っています

第2話 再会（前書き）

1組です

第2話 再会

翼side

俺は織斑先生の後に着いていきある場所に着いた
そこには1年1組と書かれた表紙があつた

「ここで待っている」

織斑先生はそう言つて教室の中に入っていた

その時

パアアアアアアン

中から鈍い音がした

『げえ、関羽！？』

パアアン

『誰が三国志の英雄だ馬鹿者』

この声は・・・夏だな

『諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らつてもいいが、私の言う事は聞けいな』

『キャーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！』

『ずっとファンでした！』

『私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！』

『あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！』

『私、お姉様のためなら死ねます！』

『私は地獄の底まで！』

・・・スゲーな千冬さん。さすが世界最強

『……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？』
あ、千冬さんがあきれてる

『きゃあああつ！お姉様 もっと叱って！！罵って！！！！』

『でも、時には優しくして！そしてつけあがらないように躑をしてく！』

女子達スゲー叫びだなー

『で、お前はまともに自己紹介も出来ないのか？』

『いや、千冬姉俺は・・・』

パアアアン

『学校では織斑先生と呼べ』

『はい、織斑先生・・・』

一夏・・・頭大丈夫か？

『え……？ 織斑君って、千冬様の弟……？』

『それじゃあ世界で唯一男でIS を扱えるっていうのもそれが関係して……？』

まあ、そりゃ驚くだろうな。何たってあの千冬さんの弟だからな・

『朝のSHRはこれで終わりだ。諸君らにはこれからIS の基礎知識を半年で覚えてもらう。その後、実習だが基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか？いいなら返事をしろ！よくなくても返事をしろ！』

『はい』

『よし、それでこれから編入生を紹介する』

『編入生？』

『そうだ、入って来い』

お、呼ばれた。俺は教室の扉を開けて中に入っていた

その時クラスの中にいた全ての人物が固まった

『自己紹介しろ』

『はい』

そう言われて俺は自己紹介をした

「龍宮翼です。趣味は読書と体を動かす事です。皆と1日でも早く仲良くなりたいたいです」

「よろしく願います」

「こうして俺は自己紹介を終えた」

「・・・き」

「き？」

「「「「「キヤアアアアアアア！！！！！」」」」」

「耳が痛くなるほどの大声だった」

「男子！しかもかつこいい！！」

「それにイケメン！！」

「地球に生まれてよかった！！」

「私もう死んでもいい！！」

「おいおい、まだ死んじゃだめだろう」

「静かにしろ！！！」

「織斑先生の一言で教室が静まりかえった」

「まったく、龍宮。お前は織斑の隣の席だ」

「はい」

「俺は幼馴染との4年ぶり再開をした」

第2話 再会（後書き）

どうでしたか？アドバイスがあったら下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5373ba/>

インフィニットストラトス ~ Brave ~

2012年1月14日23時48分発行